

いそくじ
以速寺通信

2008/8 第70号
真宗大谷派三鏡山以速寺 発行

お盆がやってきます



私のめたまた
つのがあつた
つきあつたそ
折れて
わかつた

榎本栄一

特集 お盆を迎える

お盆を迎えるにあたっては、お内仏（お仏壇）を綺麗にし、お盆のお飾りをしましよ。

まず、ほじりなごは毛ぼうきなどで軽く払い、漆塗りのところは、柔らかい布などで拭きます。なお、

金箔の部分は毛ぼうきではらう程度にし、他の金属の部分も素手では触らないようにしましよ。

さて、お盆のお飾りですが、平常のお飾りに涼しげな打敷（三角の布）をかけ、小餅を一对おそなえします。

また、小餅以外のお供えものは、お内仏（お仏壇）の外にそなえまじよ。

ところで、お盆は正式には盂蘭盆会といえます。インドの言葉の「ウランバナ（逆さじり）」を漢字に当てはめたものです。

「こんなお話が伝えられています。ある日、お釈迦さまのお弟子目連尊者（めくれんそんじや）が亡くなったお母さんが極楽でどう過ごしているか自慢の神通



力をつかって覗いてみました。すると、あるうことが、優しかったお母さんは、餓鬼道（がきどう）におちて倒懸（たうけん）＝逆さにつるされる（のような苦しみを受けていました。目の前にある「馳走を食べよう」とすると、燃えてしまつのです。

目連尊者はお釈迦さまに訴えました。「なぜ、優しかった母が餓鬼道に落ちているのでしょか。また、この母はどうすれば救われるのでしょか」

お釈迦様は答えます。「目連よ。子に優しい親が、全ての人に優しいとは限らない。多くの親は、我が子のためには、周りから鬼と言われるのを厭わない。また、この罪の深さは一人で救えるものではない。今、まさに夏の研鑽会を修了する多くの僧がいる。この僧に「馳走をもって供養し、その功德によって母を救いなさい」と。

この経説が行事になったものがいわゆるお盆です。

ところが、今日では、「ご先祖の霊を迎え入れ、ご先祖のために功德を積み、再びあの世へお見送りをする」という考え方が付加されているようです。

しかしお念仏の教えに出会われた亡き人は、ふわふわと、迷われているわけでは

ありません。

むしろお浄土から私達に、「大丈夫ですか、倒懸（逆さ）になっていませんか、頼りにならない物を大切に、本当に大切なことをないがしろにしていますか？」と絶えず心配される、「諸仏（しよぶつ）」の一人になっておられます。

そもそも、仏さまとなった亡き人に、私達が、功德を足す必要があるのでしょうか。

また、ふわふわしているのは残された私たちではないのでしょうか。

ですから、私たちは、霊が迷わないように迎え火や送り火をしたり、

精霊流しをする必要はありません。

お盆という縁を、「ご先祖亡き人を偲び、お墓参りとともに、心静かにお内仏（お仏壇）の前に座り、お念仏の教えにわが身をたずねていく」という、本来の姿としたいものです。

なお、お寺では十五日に本堂でお盆のお勤めをします。皆様のお参りを心よりお待ちしております。【詳細は最終ページ】

イラストは、東京教区「心」様のHから転載です。
<http://www.issini.nzi.or.jp/franco.htm>





以速寺の行事ご案内

どなた様も
ご参詣お待ち
しています。

つらぼんえ 盂蘭盆会

お盆のお勤め（盂蘭盆会）をいたします。

8月15日 午後7時30分から 法話 住職

* 本堂収骨を内陣へ移動してお勤め（読経）します

ひがんえ 彼岸会

秋分の日にお彼岸のお勤めをいたします。

9月23日 午後7時30分から 法話 住職

* 本堂収骨を内陣へ移動してお勤め（読経）します

彼岸会はお中日の23日にお勤めしますが、お彼岸は9月20日から26日までとなります。

本堂はいつでも開けております。どうぞご自由に参拝ください。

ほうおんこう 報恩講

親鸞聖人の毎年の法要を勤めます。

11月2日（日） 午後2時から お勤め 法話

午後7時から 御伝鈔拝読 法話

3日（月） 午後2時から お勤め 法話

報恩講法話の講師は大阪市本照寺住職沖野頼信師です



編集後記

夏休みに入った我が家の子どもたちは、クラブにゲームに漫画にと、お盆が近づくとつれ忙しくなる私とは対照的に、休みを満喫しているようです。

そんな子どもたちを見ると「ああ、この体ももう2つぐらいあつたらな。仕事する体と、遊びに行く体と、ゆっくり休む体。そうそうハリーポッターの最終巻も読みたい。」と思わず妄想にふけります。

実際やらなければいけないことは山積ですし、それとは別にやりたいことも山ほどあります。

でも、どうでしょう。妻はいいです「日がな一日ボ」とするか、全部放り出して遊びにいくなあなたが増えるだけでしょ。」と。あげくの果てには、「じゃあ私も沢山になっていいかな」と言い出します。そこできっぱり妄想から覚めました。冗談じゃないこれ以上小言を言われたくありません。

さて、お盆です。ふと、猛暑の中麦藁帽子をかぶって、黙々と草を引く父の背中を思い出します。そこからは「限られた命を一つの身で引き受けていく事実を見つめなさい。お盆の原語、ウランバナ（逆さづり）になっていませんか。大切にすべきものを大切にしていきますか。」という父の声が聞こえそうです。

皆さんはどうですか。故人はお盆に帰ってくるのでなく、いつも仏様として側におみえです。でもこのお盆をご縁に、お墓やお寺に参って、家族と仏様である故人の声に耳を傾けてみませんか。 住職 山雄 竜磨